IV　豊かさを求める労働組合運動

——日本フィルのたたかいから

佐藤　一晴

一　武道館をうめつくした史上最大のコンサート

一九八一（昭和五六）年六月三日の夕方、東京九段、北の丸公園の日本武道館は、一種異様な熱気につつまれていた。「日本フィルの再建をめざす　五〇〇人のオーケストラと、一、〇〇〇人の合唱団と、一五、〇〇〇人の市民参加の六・三大音楽会」が開催されようとしていたのである。

この日、三時から当日券待ちの列が並び、五時からダフ屋がでた。開場時刻になると、続々聴衆がつめかけてきて、地下鉄九段下駅からぶ厚いデモが押しよせてくるようだった。開演まえには客席はすっかり人で埋まり、通路にもあふれて超満員となった。実行委員会はやっと安心した。

武道館でコンサートがおこなわれること自体は、そうめずらしいことではない。ほとんどポピュラー音楽だが、クラシックの場合もたまにはある。ポピュラーの場合なら、客席が満員になることも、ままある。この日、武道館がいつもとちがう熱気につつまれていたとしたら、いくつかの特別な理由があったからで

ある。

まず聴衆動員について。実行委員会が胸をなでおろしたのは、満員になったからではなく、お客があふれでなかったからである。入場券は売れすぎていた。二週間まえにはフダ止めをしたが、自由席券はすでに定員以上配券されていた。そのままでは、パニック状態も予想された。中央実行委員会はニュースなどで自由席券の回収を呼びかけ、すでに買ってしまった人びとが辞退するのを、日本フィル闘争にたいする英雄的支援としてほめたたえた。本番前日には同じ会場でリハーサルがおこなわれたが、すでに券を買ってしまった人に、当日リハーサルを見てもらって、返券してもらう手もうった。最後には、各実行委員会ごとの最大販売許可枚数さえきめた。運動の前半では、売れ売れとハッパをかけていて、二週間まえになって突然売り止め、返券奨励ではとおらない。「大体これから売れるのだ」「もうブレーキはかからないよ」とマスコミ・文化共闘の各単産や行政区単位の実行委員会からは文句のいわれどおしだった。しかし、各実行委員会とそれを構成する労組は、よくよびかけにこたえてくれた。その組織性は実に見事だった。その結果、当日はビッチリの満員だったのである。

理由の第二は、出演者の数が多いことである。五〇〇人編成のオーケストラは、未曽有のことである。首都圏の八つのプロ・オーケストラの楽員すべて集めても七〇〇人に満たない。しかも、当然のことだがこの日仕事がすでに入っているオケもいくつかあった。また、日本ではまだ音楽ユニオンに加盟していない楽員たちもある程度いるから、ユニオン運動の一環としてのこの演奏会に参加する状態にない人たちもいる。しかも、ただ人数が五〇〇人集まればいいわけではない。均整のとれたオーケストラになっていなければ演奏にならないから、各楽器群のバランスがとれていなければならない。たとえば木管楽器群でも、フルート、クラリネット、オーボエ、ファゴットがそれぞれ一六人ずつ必要であるというように。したが

って、在京で前日の夜と当日仕事を空けられ、ユニオン・メンバーがほとんどである五つのオーケストラのほぼ全員と、オーケストラ在団経験のあるフリーの演奏家、それに宮城、群馬、名古屋、京都のオーケストラからも参加をえて、ようやく編成できた。しかも、全員、交通費と食事代程度の手当だけという、ボランティアの無料出演で、前日のリハーサルと当日のリハーサル及び本番をつとめるのである。結果は、ステージの大きさの都合で全員出演することはできなかったが、五〇〇人をこえる演奏者を集めることができた。また合唱団は一〇〇〇人の目標。プロの合唱団員は数少ないので、プロのオケとベートーベンの第九を演奏した経験のあるアマチュアの合唱団に呼びかけた。これも最終的には定員をはるかにこえる応募者があり、途中で受付を〆切り、当日のステージには、一一二五人がのった。企画をたてて当初から見とおしがたっていたわけではまったくなかったのだが、日本フィルの苦難にみちたたたかいをみずからの課題として受けとめた同じオーケストラ仲間、演奏家仲間の連帯感は、見事にこの難事をやってのけたのである。

理由の第三は、この演奏会をささえた力の大きさである。あるいは、この演奏会の特殊な性格といってよいのかもしれない。この集いはたんに大型の音楽会だというだけではなく、日本フィルの闘争支援を直接にめざした、いわば労働組合運動の決起集会でもあったのである。さらにそれを結合して、日本フィルの市民オーケストラ運動を新段階におしあげ、日本の音楽文化の発展に資すという意図ももっていた。この目的は、しっかりと受けとめられ、中央実行委員会や各単位実行委員会に参加した各級の労働組合は、いまだかつて前例をみないようなエネルギーを、この運動に注ぎこんだ。そこでは、労働者のたたかいと、文化を創造し、希求する心とが一つに結びついて、異様な熱気をかもしだしていた。この力を、立派に開花させ、運動全体の前進に結びつけなければならぬ。万が一にも何かの事故で失敗をきたすならば、日本

フィル闘争はもとより、この運動に参加した数多くの労働組合の運動の将来にとりかえしのつかぬ損失を与えることになると考えざるをえなかったのであった。[1]

開演の時刻になった。満員の客席と、広い一階アリーナを埋めつくしたステージに並ぶオーケストラは、まさに壮観であった。通常編成の約五倍のオーケストラは全員白服だが、日本フィルのメンバーだけは、胸に赤いバラをさしている。指揮者が登壇して、緊張にみちた静けさが満場を支配したのち、タクトの一振りとともに、演奏がはじまった。

肝心の演奏の方はどうだったのだろうか。人があふれるくらいだから、雰囲気はもりあがる。見た眼にも壮観であるにちがいない。集会でもあるのだから、総評議長や日本フィル労組委員長の演説や訴えもある。人気アナウンサーが司会をする。それらは、一定の感動を参加者に与えるにちがいない。しかし、何よりも、音楽自体の力で、本ものの音楽の感動で一万五〇〇〇人の人びとを一つに結びつけたいというのが、実行委員会の願いであった。演奏会場としては最悪の音響効果、「多すぎる」オーケストラ、運動としての意味はあるが、「音楽」としてどうだろうかという危惧は直前まであった。だが、最初の一振りでそれも一掃された。当夜は演奏会としても素晴らしかった。そこには音楽の楽しみがみちあふれていた。この日のライブ盤レコードに、「この統一した意志と感情は、当日の会場の熱狂的盛り上がりと、悪条件を克服しての名演を創り出した。演奏家たちはひたすら『合わせる』ことに集中した。聴衆は比類なき親密さでこのオーケストラに聴き入り、見守った。このレコードは、史上最大の規模の音楽会での、史上最高の一体感の記録であるといえよう」とあるが、まさにそのとおりだった。

精緻な陰影が十分とはいえないにしても、情感あふれる豊かさは実に素晴らしいものだったし、聴衆は

むさぼるようにステージに集中していた。曲目の最後はベートーベンの第九の四楽章だった。アンコールの用意はなかったが、会場の熱心な要請が終わらず、四楽章の途中から本当のアンコールをした。〝ブラボー〟の声は鳴りやまなかった。

感動は、たやすく醒めようとせず、終演後、会場をでた人びとは、武道館周辺でおもいおもいにいくつもの輪をつくり、語り、歌いあっていた。

二　日本フィルのたたかい

日本フィルは、一九五六（昭和三一）年、文化放送によって設立され、のちに開局したフジテレビと文化放送によって運営されてきたオーケストラである。

ドイツ音楽一辺倒だったそれまでの日本のオーケストラと明確に異なり、フランス音楽を大胆にとりあげ、また日本の作曲家に新作を依頼するシリーズをつづけるなど、楽壇では注目を浴びたスター的なオーケストラだった。この日本フィルの楽員が一九七二年六月、財団解散・全員解雇の攻撃をうけた。六〇年代にはいると早くもはじまっていた不採算部門切り捨ての合理化攻撃の完成と、直接には、前年結成され、史上最初といわれるストライキによる演奏会のボイコットをおこなった労働組合への弾圧であった。当時、音楽ユニオンはまだ準備段階であり、闘争の行方はまったくみえなかったが、多くの労働組合と、音楽あるいは日本フィルを愛する聴衆にささえられて日本フィル労組は争議に突入した。

闘争方針は、闘争拠点のフジテレビ構内の練習所を確保することと、フジテレビ・文化放送を広範な人びとの隊列で包囲し、争議解決の交渉テーブルにつかせることとした。同時に、楽員＝組合員の団結を確

保するためにも、また、大きな支援の輪をつくりあげるうえでも、オーケストラ活動を自らの手でつづけることとした。

オーケストラ活動をつづけるということは、普通の倒産争議でいえば、自主生産体制に入るということになるが、ここにはまた、特有な困難があった。オーケストラ活動はそもそも採算がとれないのがあたりまえで、日本フィルの例でいえば、七二年当時、年間予算の約半分はフジテレビ・文化放送の拠出金でまかなっていた。つまり、オーケストラの事業活動では必要な経費の半額しか稼げなかったわけである。しかも決してぜいたくなのではなく、オーケストラ経費の五〇％以上を占めるのが常識の人件費もひどい低水準であった。当時平均月収六万円余、およそ労働組合運動になじまないエリート音楽家がついに労働組合運動にたち上がり、ストライキまで敢行せざるをえない状態にあって、である。

しかし、オーケストラ活動の維持は、ただ闘争の手段であるだけでなく、この闘争の基本的な要求でもあったのである。たたかいにたちあがった音楽家たちは、低いとはいっても安定した生活を保証する職場を確保しつづけたという、一般の倒産争議と共通の要求ももちろんあったが、それよりむしろ日本フィルというオーケストラを存続させ、そこで生活をしたいという要求の方が強かった。彼らにとって、たんに生活の問題だけならば、他に音楽家として働く場所は、すくなくとも当時はみつけられたし、現にすくなからぬ仲間――当時で全体の三分の一――が闘争を放棄し、その代償として財界がこぞって作った財団に支持されるものとして、華やかに新日本フィルの旗上げをおこなっていた。

争議団員としてたたかいぬく立場をえらんだ残りの三分の二に近い音楽家たちに共通していた感情は、フジテレビ・文化放送のやり方は許せないということと、それまで一六年の輝かしい歴史をもつ日本フィルを消滅させてはいけないということであったといってよかろう。

だからこそ、オーケストラ活動を維持しながら、争議をつづけるということが必要だった。しかしこれは、至難のわざだった。ただでさえ存続の条件がないオーケストラを、争議をやっている――およそ音楽界及び音楽ファンになじみがない――音楽家集団がやりぬけるとはとてもおもえなかった。

まず、歯ぬけになった楽員の補充、そして高名な指揮者やソリストの招へい、聴衆の確保、スポンサー探し、そして楽員、事務局員の生活保障、どれをとってみても、〝争議団〟のできることではない。

しかし、日本フィルとこれを支援する人びとは、これらの難題を着実に解決していった。さしあたって不足の楽員は、闘争突入後、すぐ結成された日演協（＝現音楽ユニオン）に結集するオーケストラ支部からエキストラとして出てもらった。聴衆は、支援にたちあがった放送・マスコミ関係の労働組合が券を売って集めた。賃金は、さしあたって失業保険でしのげた。

しかし、こんなことは、どれをとっても長くつづくものではない。すぐ破たんがきた。そして、この最初の危機をのりこえさせたのは、大衆の力、争議をしていることもがまんしてくれる聴衆と、音楽も好きになりつつある争議支援の労働者たちであり、そこに働きかけることを避けなかった日本フィルの楽員たちであった。定期会員有志は、日フィルの危機が伝えられるや「日本フィルを存続させる会」を作り、自主コンサートをおこなった。争議突入後では、この会員の有志が中心になって、日本フィルハーモニー協会を組織、物心両面で日本フィルを支える活動を今日まで大きく展開している。

また楽員たちは、聴衆や支援の人びとのなかに入り、オーケストラの現状を訴え、コンサートをともに作ろうと呼びかけ、人びとはこれにこたえた。全国各地に「ガンバレ日本フィル」コンサート実行委員会が組織され、演奏会はほとんど満員という状況が生まれた。

オーケストラの活動は、大別して、自主公演と、スポンサー依頼の雇われ仕事にわかれ、ほとんどのオ

ケは自主公演の比率が小さい。自主公演は入りがよければペイするが、だめだと大赤字になる。雇われ仕事は、とても原価を上回りはしないが、確実に収入になり、遊んでいるよりはいい。こうして万年赤字になり、恒常的なスポンサーや公的助成がなければやっていけないことになる。

しかし闘争突入後の日本フィルは〝争議オケ〟であるため、恒常的にはもとより単発のスポンサーさえつかない状況でもあり、実行委員会に依拠した手打ち公演を主たる活動にするしかなかった。またオーケストラ活動が休みになってしまう夏期には、「親子コンサート」を首都圏各地のホールで開催、新しい聴衆を確保して定着し、今日までつづいている。このような新しい試みが大衆の力で成功をつづけたので、楽ではなかったが、何の公的補助も、スポンサーもない日本でただ一つのオケとして、赤字を作らずにやっていけたのである。

こうなると他の問題も解決してきて、当初ためらいがちだった高名な指揮者、ソリストも喜んで出演してくれるようになり、足りない楽員は、音楽大学を卒業する若い優秀な人びとが、さきをあらそってオーディション——公開入団審査——を受けるようになってきた。争議団に大卒の優秀な新入社員が高い競争率のフルイにかかって入るのである。そして、争議中であるにもかかわらず、人を集める力があるからこそスポンサーが出演を依頼するようになり、NHKの芸術劇場でも放映されるなど、日本の有数なオーケストラとしての市民権を得てしまったのである。いわゆる市民オーケストラ運動が成功したのだ。

市民オーケストラ運動。音楽が好きな市民たちが、みずから演奏会の企画をたて、会場をきめ、宣伝し、券を売る。あたりまえに聞こえるだろうか。わが国は、西洋クラシック音楽はえらい専門家から与えられるものとしてしか存在してこなかった、といってもいいすぎではない。楽しみではなく、教養。このカベを日本フィルの闘争がうちやぶった。ほかにどうしようもなかったからではあるが、この運動が日本の音

楽界のあり方を変えるとともに、日本フィルにたたかいの道すじを作りあげた。

この路線は、他のオーケストラにも大きな影響をあたえ、また音楽ユニオンの運動にもきわめて貴重な貢献をした。日本フィルの演奏活動と闘争への支援の輪はどんどん大きくなり、裁判所で職権和解が提示され、闘争の終結も近いかとおもわれた。一九七九年のことである。しかし、約一年間一〇回を重ねた和解交渉も、不調に終わった。解決できる条件が提示される状況でなく、こちら側から切ったのだ。まだ何かが足りないのだった。闘争突入後七年、ようやくフジテレビ・文化放送が交渉のテーブルについた。しかし、それは実らなかった。さすがに日本フィルのメンバーもがっかりして、しばらく闘争はお休みに近い状態がつづいた。演奏活動は依然としていそがしく、各地をまわり、また東京の自主公演もよくお客がはいっていた。しかし、何かかげりも感じられた。何かをしなければ。このとき提起されたのが、この大音楽会＝大支援集会であった。一九八〇年暮のことである。

三　大音楽会の果たした役割

いまだかつて経験したことのないような、巨大な集会や激しい、あるいは鋭いストライキを敢行することで、闘争の局面を大きく変えることができるのは、よく知られている。しかし、それが真に闘争の全体を左右し、勝利を準備することができるかどうかは、その行動の位置づけが正確になされているかどうかにかかわる。場所が武道館、オーケストラが五〇〇人、合唱団が一〇〇〇人、全参加者が一万五〇〇〇人、この計画はまさに史上最大のコンサートかつ決起集会の企画だった。問題は、これをどうやって成功させるのか、その成功はどのような役割を運動全体のなかで果たすのか、である。

計画を提案された、日本フィル共闘会議は、もめにもめた。一つまちがえば、闘争の命とりになりかねない「冒険」とも見えたので、真剣な討議がくりかえされ、八一年一月に提案して、最終決定は三月に入ってからだった。中央実行委員会は四月一日に発足を確認した。本番当日まであと二カ月しかない。日本フィル内部の論議も、もちろん熱心にくりかえしおこなわれ、支援共闘の意見もふくめて、結局はこの企画の位置づけが論議されたのだった。この討論がしかし重要だったのだ。

この企画の性格と意味は、日本フィル闘争の勝利を直接めざす大集会とする、同時に日本フィルの集会にふさわしく十分に鑑賞にたえる音楽会でもなければならない、さらに、これを機に、日本フィルの市民オーケストラ運動を一段と高め、日本の音楽文化の発達に資する、ということになった。実行委員会は、支援共闘会議加盟労働組合組織を中心に構成、東京都下各行政区およびマスコミ・文化共闘各単産に単位実行委員会を組織することにした。一方で、音楽の好きな広範な人びとにも参加してもらうため、各界の著名人に中央実行委員会の代表委員になってもらうことにした。

運動は、すべての面で予想をこえてひろがり、高まり、「位置づけ」も当初の意図をこえて実現された。出演者、聴衆についてはすでに述べたとおりである。音楽会としても充実したものをという位置づけで前日のリハーサルも会場でやったため、武道館を二晩おさえるなど予算は四〇〇〇万円に達するほどになり、入場料収入だけではまかなえず、一〇〇〇万円の募金もあわせて訴えたが、一三〇〇万円以上が集まり、全体として黒字で、日本フィルの闘争財政に寄与することすらできた。

代表委員も、日本の文化各界を代表する人びとが喜んで就任を承諾した。中央実行委員会に加盟した中央団体や単産も、この種の争議支援としてはまさに全力投球をしてくれた。いわば、相互の運動路線のちがいなど問わずに。運動の低調や混迷に胸いためていた幹部やオルグが、立場をこえてこのたたかいに運

動の希望をつないだ、ともおもえるほどだった。

マスコミの報道もすさまじかった。フジテレビ以外のすべてのテレビ局が、NHKのニュースセンター九時をはじめ、かなりの時間をとってこの集いを伝え、フジテレビ系列のサンケイ新聞をのぞくほとんどの新聞が大きく報道した。どれも日本フィルに好意的な内容であった。フジテレビと文化放送は孤立した。この音楽会の三週間後、東京地方裁判所は、ふたたび職権で和解を提起、以降二年有余の月日は必要としたが、この和解交渉で日本フィル闘争は勝利することができた。

しかし、特筆すべきことは、市民オーケストラ運動が新しいひろがりをかちえたことだった。市民オーケストラ運動を軸に、日本フィルの闘争がかつてない広がりを見せたが、かけているものがあった、と前節で書いた。それは、闘争勝利を直接目的にしての大衆的結集が、音楽運動のかげにかくれてもう一つ十分でなかったことである。それはオーケストラ運動と両立できないことではなかった。むしろあいともにたずさえてすすむものであった。それがそういっていないのは、闘争の現地である東京で、市民オーケストラ運動が十分に展開されていないことがむしろ原因であった。

日本フィルの活動は、闘争に入ったことでむしろ全国的にひろがった。北海道、九州、中国地方など毎年、定期的に演奏会がおこなわれ、労働組合員や市民・聴衆を軸にする実行委員会が定着し、いわば恒常的に存在する都市もかなりな数にのぼってきた。当初は、マスコミ・文化共闘関係の組合や労音を中心に組織された実行委員会も、それらの組織の人びとと、呼びかけられた聴衆のなかから積極的に実行委員会の仕事をひきうける人たちの組織になり、むしろ自覚的聴衆主導型――組織に属している人もふくめて――のものになっていった。そういう地方では、たんに日本フィルの演奏会を企画するだけではなくて、地元の文化を育てる活動にもとりくみだし、市民レベルの〝自主的文化組織〟ともいえるものになってい

った。いわば年間とおしの活動をおこないつつ、その頂点というか、〝祭り〟として年一度の日本フィル演奏会が位置づけられる。日本フィルもこの動向にこたえ、地元のソリストの起用や、学校・アマチュア集団の指導、そして郷土や組織を題材とするオーケストラ曲の創造へとすすんでいった。(2)

ところが、東京ではそうはなかなかいかなかった。いくら活動が全国にひろがったからといって、日本フィルの演奏会は、圧倒的に東京が多い。シーズン中は毎月一回の定期も、名曲コンサートも、特別演奏会も上野、新宿、五反田などの会場であり、それに横浜の定期や習志野の特別演奏会も加えれば、主要な演奏の場所は依然として、東京あるいは首都圏といってよい。そこに、いわば売りものの市民オケ運動が根づいていなかったのだ。

もちろん、日本フィル協会の会員も首都圏に多く、千代田、新宿、港などで、各区の労働組合も協力して実行委員会を作り、地域コンサートを組織する活動はおこなわれたが、赤字を生むところもあったりして、地方のように熱狂的なたかまりもみえず、恒常的な組織として定着し、定期的に演奏会を開催できるところはほとんどなかった。演奏会場もたくさんあり、毎晩のように、内外の一流オーケストラの演奏会がある東京ではやむをえない、と考えるしかなかった。また他方からみれば、東京での日本フィルの演奏会は、実行委員会の力によらず、一般のオーケストラと類似した方法で自主公演をおこなっても、お客がたくさん入るという事実もあった。

闘争突入後しばらくは、ガラガラの客席で、ステージの上の方が人数が多いのではないかとおもわれたところからみると、隔世の観があるが、やはりこれもたたかいの結果であって、闘争突入前の後日本フィル定期会員の多くは台帳をもっていかれたこともあり新日フィルにいってしまったか、その後の目ざましい活動（音楽面の）で戻ってきたり、日本フィル協会の会員が増えたり、そのことと重なってもいるが、闘

争に入った日本フィルを聴いてあらたに定期的聴衆になった人たちが、首都の日本フィルの音楽活動を支えていた。ともかく東京で演奏会をおこなうオーケストラ八つのうち、客席が埋まる率がもっとも高いのが日本フィルなのである。

首都の良さも悪さ？　も重なって、いわば運動にならなかった。したがって……、日本フィルの争議プロパーの運動も、他の闘争にくらべれば結集ははるかに良いが、とてもオーケストラ活動のひろさには及びもつかなかった。九段会館を埋めつくしたり、マスコミ・文化共闘の他の争議団と一緒になって日比谷野外音楽堂で集会をやり、成功させたこともあったし、フジテレビ社前集会や昼デモ、などもよくおこなわれ、それなりに成功していたが、特殊免許による独占事業で、つねに高成長をつづけている民間放送、そのなかでもとくにイデオロギー的な偏りの強いフジテレビにこの闘争の勝利を実現するには、まだまだ不十分とおもわれた。しかしどうすればこの壁がのりこえられるのか、誰にもわからなかったといってよかろう。

その壁が、この大音楽会で突破されたのだ。都内各行政区のほとんど、そして横浜、川崎、津田沼などにも実行委員会がつくられた。日本フィルは、組合員を、本人の希望にもとづいて、どこかの地域実行委員会の担当としてはりつけた。彼女ら、彼らは、楽器をかかえて地域に入っていった。しかも今度は、史上最大の演奏会でもあり、支援の決起集会でもあるという位置づけだったから、闘争の話もせねばならぬし、音楽の話もしなければならない。こうして、いままでとは一段高く、一回り広い実行委員会が作られてゆき、恒常的に運動体として残る実行委員会がいくつも生まれてきた。(3)

おひざもとの首都・東京で、直接に積極的な聴衆や音楽の好きな支援の労働者と結びついて、運動をつくれるようになったのである。

この経験は、当日の大音楽会を成功させる原動力になったのはもちろん、予想をこえて大きな意味を、闘争にたいしてもつことになった。

一九八四年三月一六日、日本フィル闘争は、東京地方裁判所の職権和解で解決した。その闘争はまぎれもなく勝利で終わったが、オーケストラの安定した運営を保障するという意味からは、とても満足できる解決条件ではなかった。[4] しかし、今日考えてみても、まさに長期にわたる闘争をなんとしても終結させるべき時期であった。どのような運動にも、山もあれば谷もある。従来の形態でそのまま続行すれば衰退しかないが、あらたな形態を探究できれば、活路がみいだせるという時期は必ずある。日本フィルも闘争と演奏という形態を卒業して、演奏集団としてのあらたな挑戦が必要な時期であった。

闘争の最終段階で、状況の把握をまちがわず、必要な妥協を決然とおこなって勝利のうちに闘争の幕をひくことができたのは、実にこの六・三大音楽会の、とくに東京各地に根づいた地域実行委員会の、おかげなのである。

前にふれたように、日本フィルのコンサート・オーケストラとしての存続とそこでの生活がこの闘争の根源的要求であった。資本から、オーケストラの安定した存続を保証する条件をとることはできなかった。しかし、闘争に入ってからつくりあげられた、あらたな——日本フィルにとってだけでなく日本オーケストラ史上でも——聴衆・市民とのかたい結合とまた、どんなことがあっても、大衆のなかにとびこんでいけば活路がひらかれるという経験を全楽員が共通のものとしてもっているという、まったく新しいオーケストラの体質、これこそが、争議解決の最終決断を可能にした力であり、また、日本フィル闘争の真の獲得物でもあった。[5]

四　日フィル闘争と音楽＝人間のすばらしさへの共感

なぜ、労働組合とその幹部・活動家が、立場や路線のちがいをこえて、六・三大音楽会の成功のために奮闘したのだろうか。カンパだけでみても、二七五団体から七三八万円が集まった。ただ一晩の集いを成功させるために、しかも入場者は指定席三〇〇〇円、自由席二〇〇〇円を支払うのに。こんなことがいままであったろうか。このほか、会場でのカンパが二二〇万円をこえた。これも未曽有のことではないだろうか。カンパに応じた団体のなかには総評も中立労連も、そして民間・官公労を問わず主要単産が名前をずらりとならべているが、総評書記労や地評専従者組合などというあまり普段は顔を見せない組織の名前もある。しかも、かなり巨額なのである。オルグたちがこの運動に寄せた共感がうかがわれるではないか。このほか個人もふくめてこの集会へのカンパ総額は一三〇〇万円をこえた。

このような状態をうみだした背景には、たたかう音楽集団としての日本フィルと労働組合運動の一〇年ちかいつながりがある。自分たちのたたかいを訴えるためにも、日本フィルの楽員たちは、いわばホールからとびだして、集会の会場や屋外行動へも楽器をもって参加した。総評大会で演奏したこともあるし、東京総行動では富士銀行まえや労働省中庭で、フル・オーケストラの演奏もした。日本フィルの運動のヤマ場では、しばしば小編成で、さまざまな労組の各種集会に積極的に出て演奏し、たたかいを訴えた。マスコミ・文化共闘の春闘などの大集会では、日本フィルのオーケストラ演奏があるのがあたりまえになっていった。

音楽が加わることで、集会は眼に見えるように生き生きとした。それは、たんなる添えもの、アトラク

ションではなく、集会参加者の喜びであり、目的ともなっていった。音楽の喜び、つまり人間のやさしさ、美しさを演奏家も聴衆も一体となってお互いにたしかめあう感動は、それぞれの集会の目的がおのずとめざしている人間的なるものの回復のねがいと、ピッタリ一致した。演奏が運動や集会の目標を体現したといってもいいかもしれない。集会参加者は、そして日本フィルも、音楽を通じて、人間とその文化のすばらしさを共感できたのである。

この経験は、日本フィルとその周囲の労働組合のかぎられた範囲からひろがってもいった。本来、演奏すべき場所ではないところで、演奏することをためらいがちだった音楽家たちも、日本フィルの経験を見たり聞いたり、たまにはエキストラとして一緒に参加したりして、変わっていった。シンホニイでさえそうなのだから、ジャズ音楽の演奏家はもっと気軽に街頭へもでかけた。東京総行動のデモにブラスバンドがつくのも、当たりまえになった。マスコミ・文化共闘の街頭宣伝・署名行動には必ずといっていいほど、デキシイバンドの演奏やフォーク歌手のうたがある。都響が東京都庁の内庭で演奏をし、群響が群馬県庁前庭で演奏した。名古屋の栄総行動にも必ずジャズバンドが出演する。

このような状況をつくりだした原点である日本フィル闘争の勝利は、もとより関連した労働組合や個人の熱い願いであったが、日本フィルを支える幅広い人びとが一堂に会して、史上初の大編成オケ——つまり日本フィルをはじめ、ともにたたかう大音楽家集団の演奏会兼決起集会に参加する、あるいは成功させ、たたかいと音楽の結合の喜びをみんなで確認したいという思いが膨大なエネルギーとなったのではなかろうか。

そこには、最近の労働組合運動全体の状況や、そのもとでの個々の組織の苦闘もまた、反映されていたのであろう。

五　豊かさを求める文化の追求

この六・三大音楽会には、その構想からして、長期争議にともないがちな悲愴感はなく、基調になっているのは〝豊かさのイメージ〟であったといえる。それは、資本がほおりだしたオケを、労働者・市民が自前でささえる〝豊かさ〟であり、しかもその闘争集団のオケを支える人びとは音楽界をはじめ実に広範で、当日ともに演奏する音楽家も、それ自体で音楽界の多数派を形成している〝豊かさ〟であり、そしてなによりも音楽自体がもたらす〝豊かさ〟であった。

貧しいから、たたかうのではあろうが、たたかって勝利してはじめて豊かになれる、という単純なことですむはずはない。〝ほんとうの〟あるいは〝最後の〟勝利までいつも貧しくなければならないのでは、とてもたまったものではない。貧しさの強調だけで運動をつづけていける時代ではないのだ。たたかいのなかでこそ、豊かでなければならない。それも精神主義的な、自己犠牲的、英雄主義的な喜悦や悟達だけではなく、実際にふれられるような手ごたえのある〝豊かさ〟が必要なのだ。その点に従来の労働組合運動の側では欠けるところがあったのかもしれない。

〝豊かさ〟を実現するうえでは、ひとことでいって文化性が必要だし、その文化は質の高さと多様さと自主性が求められる。日本の社会も成熟してきているし、労働の社会化の度合もすすんでいる。その水準にふさわしい〝文化〟が求められるのは当然である。労働組合運動としても、「労働者社会」の形成や文化のとりくみの重要性が最近論じられているようだが、たたかっていれば自然にみたされるものでもないし、たたかいなしで達成されるものでもないが、この面でより目的意識的にとりくむことの必要性、この

課題の比重の重さ、あるいは労働者大衆の要求の強さを再確認する必要がある。

人間は、いつでも、全面的に生きようとしているのだ。

そして、真の〝豊かさ〟には自主性というファクターが重要である。企業が、労働者生活の全側面にわたって包摂しようとしていることはよく語られているし、さらに企業の地域政策や流通産業の新しい販売政策によって、住民としての労働者・都市小生産者層も捕捉されようとしているともきく。音楽の分野でいえば冠コンサートなるものも流行している。この、いわば資本による国民の「統合」はある程度成功するわけだろうが、それで人間のすべてがくみつくされるわけではない。多少、不便だったり、自腹を切らねばならなかったりするが、自主的な参加を保証する資本からの「自由」はかけがえのないものであろう。

労働者が自前の社会やつきあいをもち、自前の文化をもとうとするのは当然の要求だ。

そして最後に一言つけ加えれば、この分野の活動の前進も、ある一定の限度で、側面的ではあるが、「企業内従業員組合主義の克服」という、日本の労働者階級の戦略的課題の達成に大きな影響をもち、自立した自主的労働者組織の建設によって、変革主体の形成にも貢献できるのではなかろうか。日本フィル闘争もそのことを証していると私は考えているが、それはまた別に論ずべき問題であろう。

（1）日本フィル再建をめざす、一五、〇〇〇人大音楽会中央実行委員会

●代表委員

朝比奈隆（指揮者）稲葉三千男（東大教授）井上ひさし（作家）江藤俊哉（ヴァイオリニスト）大河内一男（元東大総長）桑原武夫（京大名誉教授）新村猛（名大名誉教授）杉村春子（女優）千田是也（演出家）滝沢修（俳優）武満徹（作曲家）堅山利文（中立労連議長）中村歌右衛門（芸団協会長）中野好夫（評論家）槇枝元文（総評議長）松本清張（作家）三善晃（桐朋学園大学長）安川加寿子（ピアニスト）

●構成団体

総評、中立労連、日教組、国労、東京地評、都労連、国労東京地本、マスコミ・文化共闘、新聞労連、全印総連、日放労、民放労連、出版労連、映演共闘、広告労協、日演協、日音労、新宿地区労、千代田区労協、東京争議団共闘、日本フィル労組、日本フィルハーモニー協会

(2) 交響詩「風雪」作詩土井大助、作曲外山雄三、国鉄労働組合三〇周年記念、一九七九年。「交響詩まつら」作曲外山雄三、福岡県唐津市、一九八二年。

(3) 中央実行委員会六回、単位実行委員会六四回（一一七三人参加）。統一オルグ一三〇七団体、二九五四回オルグ。演奏つきオルグ六七回、以上いずれも一ヵ月半の間のこと。

(4) 和解条項の主要な内容は、フジテレビと文化放送が二億三〇〇〇万円の解決金支払義務を認めるということである。労組は財団解散を承認し、フジテレビ構内から退出することになった。

(5) 闘争終了後、共闘会議の主要メンバーを中心にして、日本フィルの練習所建設をはじめとする一〇億円募金運動の準備がすすんでいる。